

鈴木 雅 明

チェンバロリサイタル

日時 / 昭和61年11月2日（日）、

開場 午後1時半

開演 午後2時

場所 / 四ツ家カトリック教会

主催 / 盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

問い合わせ 0196 (41) 1507 (木村)

## ごあいさつ

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン代表 木村 吉彦

私共の敬愛する鈴木雅明先生が、バッハのゴールドベルク変奏曲をひっさげて全国縦断コンサートを行うことになりました。日頃の御恩をお返しすべく、盛岡公演は私達がおひきうけいたしました。先生の深い宗教性に裏づけられた音楽に、こういうかたちで接することができますことは光栄であり、また大いなる楽しみでもあります。地方にありましては、本格的な音楽芸術に接する機会は、残念ながら決して多くはありません。その意味で、音楽家鈴木雅明と盛岡とのつながりを大切にしていかなければ、と思っています。

今回を出発点として、これから何度でも盛岡公演をもっていただきたいと願わずにはおれません。皆様と共に鈴木先生の音楽を心ゆくまで堪能したいものです。

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン常任指揮者 佐々木正利

### 『鈴木雅明讃』

雅明君と知り合ってから早15年になる。既に第一期黄金時代を終えていた東京芸大バッハ・カンタータ・クラブに作曲科の一学生がチェンバロを弾くといって入ってきた。確かに作曲科らしく、どこか我々と違った風貌が感じられるが、本当にチェンバロが弾けるのかしらん?……疑った。ところが開けてみてびっくり、そのチェンバロは既に我らが尊敬する師小林道夫に比肩する腕前、それどころか器楽に歌に信じられぬ程の鋭い指示をとばすのだ。これには長年クラブを指導してきた私も驚いた——ウカウカシテラレナイ——。でも、考えてみると彼の力は我々にとっては正に救いの神、そう、我がクラブはこの時瀕死の状態にあったのだ(事実、この後第二期黄金時代へと着々と力をつけていった)。

さて、彼の鋭い眼光のルーツを幼稚園時代に遡ろう。驚くべきことに幼くして彼は自力で洗礼を決意したのだ(幼児洗礼ではない)。その後、灘高の秀才だった彼は東大をけて芸大へ進み、作曲科に籍をおく傍ら、鍋島氏のもと、既にチェンバロの師範をしていた。と思えば並居るオルガン科の現役をけ散らして唯一人大学院オルガン科へ進学する。こうして彼はついに世界でも極めて稀なチェンバロ、オルガン両方こなせる、折り紙つきの大演奏家になったのだ。国際コンクールで両部門とも荣誉ある成績を収め、20代の信じられぬ若さで西ドイツ・デュイスブルク国立音楽大学のチェンバロ科講師になっている。特筆すべきはその通奏低音奏法で、楽譜を完璧に読みきれただけでなく、次への展開も完全に予想尽くせる彼ならではの見事な演奏は、全く他の追従を許さない。オルガンにおいても、様式感の適確な把握はもとより、更に重要なレギスター(ストップ)の選択や即興演奏に特別な冴えをみせる。我が子のようにどのオルガンをも手なずける彼の手腕は、特に請われて松蔭チャペルの世界的名器ガルニエのオルガン奏者、管理者として彼を日本に呼び寄せてしまった。このオルガンで、今後数々の偉大な業績を残すに違いない。

地味ながら彼の業績をあと二つ。それはカルヴァン研究と運指法の開拓である。特に運指法については、我らが世界に誇れるものとして彼の師広野氏でさえ「雅明君の運指技術は全く見事という他ない」と絶賛している(4と5の指だけで♪≡126の♩♩スケールをこなせますか?)。

こうした鋭い英知と確かな技術を最大限に生かしきっているのは彼の豊かな人間性である。その包容力と奥の深さに今まで何べん助けられたことか。彼は決しておごることなく常に謙遜に人に尽くす。クリスチャンの先輩として見習わなければ、といつも思っている。

本日、雅明君のゴールドベルクを聴けることは私にとって二重の喜びである。演奏への期待は当然ながら、今まで語り尽くせぬ程お世話いただいたカンタータ・フェラインが微力ながら恩返しできるからだ。でも本当の恩返しは我々が心のこもった良い音楽をすることだ。その時のためにも、「鈴木雅明の世界」に十分浸らせて備えをなそうと思っている。

## ～演奏曲目～

J.S. Bach.

## ゴールドベルク変奏曲

BWV 988.

使用楽器：W.クルスベルヘン(オランダ、ユトレヒト)1982年作成  
フレミッシュタイプ2段鍵盤8・8・4.

## ～曲目解説～

ゴールドベルク変奏曲には「種々の変奏をもつアリア」という Bach 自身が与えた別名称がある。2段鍵盤付クラヴィチェンバロのためのこの曲は、Bach 最後の創作期に生まれ、カノン風大曲集の最初のものである(出版は1742年頃)。正にこの後の作品群には「音楽の捧げ物」「フーガの技法」といった大作があげられる。

本来、Bach は変奏曲を、基礎和音の繰り返しとしてあまり望まなかったが、この曲に限っては興味深い話がある。ある貴族が不眠症にかかり、その眠れぬ夜を慰めるためにと弟子のゴールドベルクが演奏する作品として、創られたというものである。効果は満点だったというが、それ程、音楽的にすぐれ精神の安定を促したのだろう。この大曲は、ゆったりしたアリアで始まり、それはあらゆる可能性を尽した30の変奏へと続き、最後にまたアリアの再現で結ばれる。区切りとしては第17曲でフランス風序曲となり全曲の2部構成を示す。

配置設計を簡単に記しておこう。調性はト長調であるが3度だけト短調となる。(変奏15、21、25)配列に注目すると3の倍数の変奏がカノンから成っていることがわかる。(3、6、9……)しかも、旋律を受持つ2声部の音程は、同音から始まり一音ずつ広がってゆく。第27変奏曲は9度のカノンになるのである。カノンの前の変奏も次第に高度になっていき、総じて、形式の多彩さ、あらゆる技巧において、この曲はクラヴィーア技法の精髓を示すものである。個々の変奏曲が性格的(陽気、半音階、荘重、舞曲風等)に充実し、チェンバロの魅力総てを引き出してくれる——これ程までに画期的作品の演奏を生で体験できることは最高の幸せであると思う。

及川 彩子

## ～ プロフィール ～

鈴木 雅明（オルガニスト・チェンバリスト）



神戸に生まれる。12歳より教会のオルガニストを勤め、東京芸術大学作曲家にて、故矢代秋雄に師事。卒業後、同大学大学院オルガン科に於いて、広野嗣雄に師事すると共に、古楽研究会に於いて、チェンバロを鍋島元子に学んだ。さらに1979年より、アムステルダム・スウェーリンク音楽院に進み、チェンバロをトン・コープマン、

オルガンをピート・ケーに師事。同音楽院よりチェンバロとオルガン双方のソリスト・ディプロマを得た。その間、1980年には、ブルージュ国際チェンバロ・コンクール（通奏低音部門）において第2位（1位なし）、1982年には、同オルガン・コンクールに第3位入賞を果たした。西ドイツ・デュイスブルク国立音楽大学講師を経て、現在、松蔭女子学院大学（神戸）、及び、桐朋学園大学（東京）にて教鞭をとっている。

松蔭女子学院大学に於いては、特別に音響設計されたチャペルとマルク・ガルニエ製作によるフランス・クラシックオルガンを用いて、積極的にコンサートシリーズを企画する他、全国各地でチェンバロ・オルガン奏者及び指揮者として演奏活動を行い、またオランダ・ドイツ・フランスを中心とするヨーロッパ各地では、毎年コンサート・ツアーを行っている。

プロテスタント教会音楽の研究も手がけ、特にカルヴァンの詩篇歌の普及に努めている。日本キリスト改革派東京恩寵教会オルガニスト。